

源 淳君

光 照 君

井松平伝記抄	年譜の一部	(県立図書館蔵)

明治、大正、昭和を生きた栗山津禰のルーツをこの400年以上も前の壮大なスケールの中で捉えられる

栗山家のルーツを検証するため、いつたん戦国武将たちが山野を駆け巡っていた通りにまで遡つてみたい。1590(天正18)年、豊臣秀吉の命によつて関東移封を強いられた池田家康(旧姓松平)。それに伴い一族である三河武田團も大移動となつた。「實政重修諸家譜」に「十八松平氏」のひとつと数えられている、三河国藤井を領していた通称藤井松平も、時を同じくして2代信一が下総国荒川(現茨城県利根町)に移つてゐる。この中実が栗山家に深く関わつていくことになるのである。

やまがた再発見

348. 栗山津禰 申

編集出版工房「書肆犀」主宰 岩井哲

先祖、藩主に従い上山へ

かつて栗山家の住まいがあつた上山市の武家屋敷通り

烈神社の近くであつた。当時の山形新聞の記事を見ると判兵衛は山形中学校の書記の職に就いていたようだ。そのことから考えて、父の就職が上山を離れた主要な理由であつたと推測される。

さうでもないことが、

當時は上山から山形まではよ

ほどのことでもない限り徒步

で往来するしか術はなく、今

のようになつてゐる。

明治政府による版籍奉還によつて、武士としての身分と禄を同時に失つことになつた旧藩士たちは、皆例外なく家の再興のために奔走したはずであり、栗山家の当主判兵衛にとつても同じであつたに違いない。

転居先は現在の香澄町、豊

浦の上山―山形間の開業は1

901年4月まで待たなければ考へられなかつた。奥羽本

線の上山―山形間の開業は1

901年4月まで待たなければ考へられなかつた。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考えられる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのであ

る。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自伝の中に幼い頃を回想した小文がある。それはこんな書き出しで始まる。「私の四歳になつた」。妹が生まれておなかになつたので父を残して一家は祖母せきの住む上山に移つたというのである。さうに記憶を呼び覚ましながら「当時は汽車の開通もなかつたか

ら、私等家族は人力車を揃えてK町に向かつた。私は祖母に抱かれていた」と続けている。父は仕事の関係でどうだろ。そんな父であつたが

折を見て家族のもとに戻り、

よく遊んでくれたとも書いて

いる。穏やかな津禰の幼年期の一こまでり、心あたたま

る家族の風景でもある。

父判兵衛と母きよは、女子

5人、男子1人の子宝に恵ま

れた。ただし、末子の男子は

早世したらしく、残念ながら

過去世に戒名「幻夢善華子」

ばならなかつたのである。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考えられる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのである。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自

伝の中に幼い頃を回想した小

文がある。それはこんな書き

出しへ始まる。「私の四歳になつた」。妹が生まれておなかになつたので父を残して一家は祖母せきの住む上山に移つたというのである。さうに記憶を呼び覚ましながら「当時は

汽車の開通もなかつたか

ら、私等家族は人力車を揃えてK町に向かつた。私は祖母に抱かれていた」と続けている。父は仕事の関係でどうだろ。そんな父であつたが

折を見て家族のもとに戻り、

よく遊んでくれたとも書いて

いる。穏やかな津禰の幼年期の一こまでり、心あたたま

る家族の風景でもある。

父判兵衛と母きよは、女子

5人、男子1人の子宝に恵ま

れた。ただし、末子の男子は

早世したらしく、残念ながら

過去世に戒名「幻夢善華子」

ばならなかつたのである。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考え

られる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのである。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自

伝の中に幼い頃を回想した小

文がある。それはこんな書き

出しへ始まる。「私の四歳になつた」。妹が生まれておなかになつたので父を残して一家は祖母せきの住む上山に移つたというのである。さうに記憶を呼び覚ましながら「当時は

汽車の開通もなかつたか

ら、私等家族は人力車を揃えてK町に向かつた。私は祖母に抱かれていた」と続けている。父は仕事の関係でどうだろ。そんな父であつたが

折を見て家族のもとに戻り、

よく遊んでくれたとも書いて

いる。穏やかな津禰の幼年期の一こまでり、心あたたま

る家族の風景でもある。

父判兵衛と母きよは、女子

5人、男子1人の子宝に恵ま

れた。ただし、末子の男子は

早世したらしく、残念ながら

過去世に戒名「幻夢善華子」

ばならなかつたのである。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考え

られる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのである。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自

伝の中に幼い頃を回想した小

文がある。それはこんな書き

出しへ始まる。「私の四歳になつた」。妹が生まれておなかになつたので父を残して一家は祖母せきの住む上山に移つたというのである。さうに記憶を呼び覚ましながら「当時は

汽車の開通もなかつたか

ら、私等家族は人力車を揃えてK町に向かつた。私は祖母に抱かれていた」と続けている。父は仕事の関係でどうだろ。そんな父であつたが

折を見て家族のもとに戻り、

よく遊んでくれたとも書いて

いる。穏やかな津禰の幼年期の一こまでり、心あたたま

る家族の風景でもある。

父判兵衛と母きよは、女子

5人、男子1人の子宝に恵ま

れた。ただし、末子の男子は

早世したらしく、残念ながら

過去世に戒名「幻夢善華子」

ばならなかつたのである。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考え

られる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのである。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自

伝の中に幼い頃を回想した小

文がある。それはこんな書き

出しへ始まる。「私の四歳になつた」。妹が生まれておなかになつたので父を残して一家は祖母せきの住む上山に移つたというのである。さうに記憶を呼び覚ましながら「当時は

汽車の開通もなかつたか

ら、私等家族は人力車を揃えてK町に向かつた。私は祖母に抱かれていた」と続けている。父は仕事の関係でどうだろ。そんな父であつたが

折を見て家族のもとに戻り、

よく遊んでくれたとも書いて

いる。穏やかな津禰の幼年期の一こまでり、心あたたま

る家族の風景でもある。

父判兵衛と母きよは、女子

5人、男子1人の子宝に恵ま

れた。ただし、末子の男子は

早世したらしく、残念ながら

過去世に戒名「幻夢善華子」

ばならなかつたのである。

その判兵衛だが、教壇に立つた記録はないようだ。書記の仕事は現在の学校事務職に

近かつたのではないかと考え

られる。それを物語るエピソードが前掲の「上山郷土史」に載つている。11年5月8日、山形市北大火で、初代県庁、警察署、市役所、図書館など焼失してしまつた山形中学校の校舎再建を任され、判兵衛は理想的な新校舎建設のため、精力的に他県を視察して回つたといふのである。そればかりではない。同年、寸暇を惜しんでまとめていた著書「金子萬歳翁小伝」を上梓している。父道紹ゆすりの求道精神が筆を運ばせたのである。

さて、津禰についても触れておかなければなるまい。自

伝の中に幼い頃を回想した小



東洋大支那古字文字研究室で写真に納まる栗山津輔(後列右)
=1933(昭和8)年(「紫式部学会と私」より)

時代は泥沼の日中戦争へと傾斜していく流れにあり、表現の自由は著しく制限され始めていた。



たが、このメンバー構成を考え、会の運営の具体的な切り盛りは主に津爾と貞の2人に任せていたのだろうと思われる。



提案で、池田隼鑑と花崎貞、津禰の3人は朝日新聞古典部を介し、歌舞伎座支配人（当時の松竹常務）に面会を果たし、懐にあたためておいた企画を提案、ついに歌舞伎座での「源氏物語」上演が決定するのである。

そして51年3月、津禰の悲願であつた源氏物語劇歌舞伎公演が初めて開催されたのである。津禰の喜びはいかばかりであつたろう。戦後復興を文化面から推進する津禰の功勳はいや應なしに世間の注目を浴びることになる。日本文学の歴史にその存在感を示している名作源氏物語を、伝統芸能の歌舞伎で、しかも豪



して、戦後復刊第1集刊行
と題した創刊号と同様の巻
言を配置していた。「わたく
達は、文字を通じて、日本人
なもの美しさ、正しさ、
るさを求め、現代日本人と
ての高雅な趣味と教養とを
めたいと思います。従つて
らさきは華々しい思想家や
者や芸術家を作り上げよう
志すのではなく、むしろつ
ましやかに自らを省み、己
むちうつて、よき日本人た
ことを庶^{ひし}う人々の前に、捧^{ささ}
られるべきものであります
それらを見届け、津彌は
1年1月4日、71年の生涯を
じるのである。

源氏物語上演へ献身

1920（大正9）年、東洋大国文学科をみごと首席で卒業した栗山津禰は、教育現場を仕事先として選び、2年間女学校の専攻科で教鞭をとっている。その後は年表に22年から30年（昭和5）年、東京府立第五中学校（現在の都立小石川中等教育学校）で漢文科教師として8年間勤務とある。実はこの学校は男子校で、津禰は漢文を教える初めての女性教師として、また

349. 栗山津禰 下

編集出版工房「書肆犀」主宰 岩井哲

岩井哲

しても新聞各社の取材を受け、話題になつたようである。漢文科の先生にこだわつたことについて津禰は次のように述懐している。「女学校に専攻科に漢文を受け持つていい」といっても国語も教えなければならぬので、中学校にでも奉職したら、と思った。(中略)それで母校に行って『私を中学校で使つてくれないかしら』などと、『女が中学校の教員』と幹事の先生から笑われてしまった」ところが、時代は高い専門的知識と広いフィールドワークを併せ持つ人材を始め始めたのだ。間もなく津禰の願いが叶い、晴れて勤務することになったのが第五中学校だったのである。

中務伴の「」王がなくて にけいじつた。支

國語

け、話題になつたようである。漢文科の先生にこだわったことについて津禰は次のように述懐している。「女学校で専攻科に漢文を受け持つていいつても国語も教えなければならぬので、中学校にでも奉職したら、と思った。(中略) それで母校に行って『私を中学校で使ってくれないかしら』などと、『女が中学校の教員』と幹事の先生から笑われてしまつた」ところが、時代は高い専門的知識と広いフィールドワークを併せ持つ人材を求め始めたのだろう。間もなく津禰の願いが叶い、晴れて勤務することになったのが第五中学校だったのである。

退職し、東洋大文支那哲学文学研究室に籍を置きながら、女性向けの文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験、通称文検準備のための国語漢文講座を開くことを決意したのである。母校東洋大を会場にしてのスタートとなつた。その中で津禰は、当時東京帝国大教授の藤村作博士に、国語講座の教材として源氏物語を使用したい旨の相談をしている。藤村博士は24(大正13)年、雑誌「国語と国文学」を創刊した人物、あるいは井原西鶴の研究家としても知られる国文学界の重鎮であつた。このような環境と人間関係に恵まれていたことが紫式部学

会設立への端緒となり、雑誌「むらさき」の創刊、ひいては歌舞伎座での源氏物語上演へと結びついていく礎となつたのである。

津禰の著書「紫式部学会と私」に寄せた文学博士久松潛一の序文に次のよつたことが書かれている。「漢文を学んで国文学にも深い理解を有せられる氏(津禰)は、その中、國文学講座の開設に骨身を惜しまず努力されるようになつた(中略)紫式部学会が出来、雑誌むらさきの刊行や源氏物語劇講座が設けられるに至り(中略)栗山女史なくしてはことがはこばなかつたであろう。名利をもとめず、ただこ

の会のために献身されること
数十年に及ぶその功績は極め
て大きいものがある」

これを読む限り、津禰はま
ず女子教育発展と女子教員養
成のため懸命に努力していた
ニュアンスが伝わってくる。
さらにその過程において、津
禰の重心が徐々に文検から紫
式部研究、つまり源氏物語そ
のものの魅力に移つていった
ようにも読めてくる。

主義思想下、皇室を舞台とする男女の情愛劇の上演を許してくれる時代ではなく、ついに強権的な禁止命令が出されてしまうのである。津禰はそんな状況について逆説的に「戦争には文化事業は滅びなければならなかつた」（原文ママ、「紫式部学会と私」より）と書いている。

しかし忍耐は続いた。翌34年、紫式部学会を母体として源氏物語研究誌「むらさき」を創刊、輝かしき第1号の編集後記は津禰自身の筆によるものであった。それ以降、厳しい状況の中、刊行を続けるが、ついに44年6月、戦況の悪化の中で刊行は途絶する。そしてわが国はその翌年、300万人以上の犠牲者を出し、ついにポツダム宣言を受諾、無残にも敗戦を迎える。その痛手を昇華し、再び津禰が輝き出すにはさすがに5年ほどの歳月を要したようである。戦前頓挫していた源氏物語劇の上演の夢を捨てきれず、動き出す。50年、津禰の

華キヤストで演じさせると
う趣向は、源氏物語の名を
層広め、研究者のみならず
もが楽しめる作品であるこ
とを世に知らしめることにも
つたのである。

「歌舞伎座百年」の「4
復興から現代まで」を見る
当時の様子は次のように記
されている。「3月は『源
物語』の上演で大きな話題
呼んだ。舟橋聖一脚色・谷
潤一郎監修・久保田万太郎
出のほか、美術・作曲・振
にも最高のスタッフを配し
海老蔵（十一代目團十郎）
源氏を中心に、梅幸の桐壺
藤壺、松緑の頭中将、猿之
の御門など、適役を揃え、
舞伎座の広大な機構を活用
た舞台は、果たして興行的
大成功を収め、異常なほど
大入りを招いた」

余波は予想外に大きかつ
ようで、津禰にとつて至福
時だったに違いない。その後
新橋演舞場から尾上菊五郎
団による狂言「なよたけ抄
（竹取物語の由来を作品化



雜誌「むらさき」の 創刊号表紙